

日本間

能村 研三

記念ビデオ作製

浮雲は眠りのかたち鳥帰る

春一番坂ある街の書肆廃る

清冷な笥の水に独活晒す

あるがまま春は行つたり来たりかな

とれさうな釘ちぎりぬ春愁

花の種文字書くやうに蒔きにけり

春コート本屋の中のわが順路

日本間に椅子ある暮し花明り

諸葛菜咲かす土塁は江戸名残

理科室へ一番に来るさくら冷

「沖」創刊五十周年を祝う祝賀会はコロナ禍による蔓延防止等のため三度延期された。五月二十四日は、二十一年目の登四郎忌である。その前の五月二十二日に、ついに規模を縮小しながらも開催することとした。名称も五十周年新緑祝賀会と改めた。

前回の四十五周年の時にも披露した「沖の歩み」を映像で見せしようとこれまでの五十年分の写真の抽出をした。今回は「沖」の五十年の礎を築いてくれた人たちに焦点をあてて紹介したいと考えている。

二年前に刊行した沖誌「五十周年記念号」では、メイン企画となった「沖の源流」に五三三名の沖人と作品を紹介した。これまでの五十二年間、「沖」という同じ俳句の土俵をともにした人の熱い絆はこの上もない掌中の珠とも言える。

コロナ禍により会が二年近く延期される中、この祝賀会の日を一緒に

祝っていた良かった方にも、延期されている間に体調を崩されるなど大きな変化を余儀なくされた事もあった。

そんな中、お客様として当日お祝いの言葉をいただくことになっていった、鈴木節子さんの訃報が突然入ってきたことは大きなショックであった。出欠を確認する電話の中の「二十二日はタクシーを乗り継いで、杖をついても行くので楽しみにしています」という元気な声が今でも耳に残っている。

節子さんが「沖」に在籍時代、勉強会に向かう途中の列車で先師登四郎と並んで座っている写真や、私と吉見の百穴で一緒に撮った写真も紹介しようと思っている。

数々の苦難を乗り越えての祝賀会となった。これまでの記念会に増して一生の思い出になることに相違ない。

能村 研三